介護等体験実習に向けて

学校教育と社会福祉

別府大学文学部人間関係学科
講師　尾　口　昌　康

約15年前、「人の心の痛みのわかる教員、各人の価値観の相違を認められる心を持った教員の実現に資する」ことを目的に、義務教育諸学校の教員免許状を取得する者に「介護等の体験」が導入されることが決まりました。大学時代に特別支援学校などで教育実習を経験し、卒業後は社会福祉の仕事に従事していた私は、「これからの先生は何かが変わるぞ」という期待を抱くと同時に、学校教育と社会福祉の距離が近づいたことを嬉しく思いました。

さて今回、介護等体験に関する講義も人間関係学科以外の学生の皆さんに対してお話をするのも初めてのことでした。この講義を担当しての正直な印象は「もっと一生懸命聴いて欲しかった」ということです。多くの学生は真剣な眼差しで聴いてくれたのですが、中には心構えが十分にできていないような学生もいたように思います。皆さんは教育心理学等の科目で「傾聴」という用語を勉強されたことでしょう。将来、悩み苦しむ児童生徒に出会ったとき、彼らの気持ちを少しでも理解するために、今のうちから「相手の話に耳を傾ける」ことに心がけて欲しいと思います。

ところで、実際に介護等体験に行ってみて、皆さんはどのような感想を持ったでしょうか。今まで支援が必要な高齢者や障害のある人と触れ合う機会が少なかった方は、特に関心を持つことなく過ごしてきたかも知れません。でも私たちは、いつかは高齢者になるし、不慮の事故で障害を持つかもしれないというリスクを常に背負って生活しています。今回の体験をきっかけに、より一層、支援を必要とする人々への関心を深めていただきたいと思います。

また、例えば一言で「施設を利用されている高齢者」といっても、その方の健康状態や家族背景、今までの人生経験や現在抱えている問題などなど、一人一人大きく違うということも理解しておく必要があります。

ここで一つ、社会福祉の専門用語を紹介したいと思います。社会福祉を専攻する学生が必ず学習する内容に「バイスティック（Biestek,F.）の７原則」があります。その中の一つに「個別化の原則」、つまりクライエント（利用者）を個人として捉えなければならないという原則が存在します。これを学校教育に照らし合わせて考えてみましょう。

近年、教育の現場は多くの課題を抱えているという話をよく聞きます。先生方も疲弊しているというのも事実でしょう。しかし、「問題児」「教育困難校」「モンスターペアレント」などと、相手や状況をひと括りに表現するのは簡単です。その時に前出の「個別化」の原則を思い出し、少しでも意識した教育を実践すると、何かが変わるかも知れません。

相手を理解しようと努力し続けることは、学校教育と社会福祉の共通点だと私は思っています。今回の介護等体験で得たものを、少しでも教育の現場に活かして欲しいと願っています。

人と関わる仕事を目指す人たちへ

からだの教室Laugh
別府大学　非常勤相談員　阿　部　京　子

ここ数年、介護等体験実習に臨む学生さんへ特別支援教育についてお話させていただいてます、阿部です。

介護等体験実習を終えて、人と関わる仕事についての印象はどう変化したでしょうか。

講義の感想を書いていただくと、相手がいる現場への不安を訴える学生さんが多いのが昨今の特徴のように感じております。物事に対応するとき、不安が強いことは心配な面もありますが、いい点も多くあると私は捉えています。

大切な点は「不安を感じている自分」を認め、不安の要素がどこにあるのか、「向き合う勇気」「突き止めて解決するスキル」を持つことだと思います。

人に関わる仕事は、相手次第で千差万別、正しい回答など存在しません。ベテランと呼ばれる人ほど、自分が行った対応に対して真摯に向き合い、反省し、次へ生かすシュミレーションを何度なく繰り返しているだけです。

人相手の、指導する立場の仕事とは、正しい回答がないから勝手にすればよい訳でもなく、相手の小さな変化や成長を発見しては自分の働きかけがどうやら正解であったようだ、とするしかない地道で自己満足な世界です。

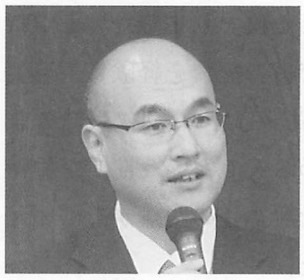
まず、自分自身が素直に、健康的に、人を信じて、楽しく生きてください。不安を感じた時には、恥ずかしがらずに認める勇気を持ち、友や師に助言を仰いでください。助けを求められる人は、人の助けを求める仕草に敏感に反応できるはずです。自分が心身ともに健康でなければ、人に関わる仕事はつらいだろうと思われます。

自分が何が好きで、何をすれば心が晴れるのか、探し続ける努力を辞めないで下さい。仕事や日常に忙殺されず、魅力ある人間になってください。

人と関わることって楽しいんだ、と子どもに教えてあげられる素敵な教育者が輩出されることを願っております。

教育に命を込める

大分県社会福祉士会理事　Healing forest代表
別府大学　非常勤講師　明　石　二　郎



「技術とは何か」

最近、教職の方々も受講が増えてきている当方の面接技術のセミナーで、必ず伝えていることがあります。

「技術とは、道具なのです。道具は、使う人によってその意味が変わってしまいます。例えば包丁。包丁は、料理人が美味しい感動するような料理を作ろうと思う人が使えば、すばらしい道具になります。ですが、使う人が変わると人を傷つける道具にもなるのです。」

教職者が使う技術があります。大学の学びの中や教育実習で身につけていることでしょう。そして、これからその技術を、受け持つ子どもたちに、向き合う子どもたちに届けることになります。どのような技術を使う先生なのか、不安と期待を寄せながら、子どもたちは、一人の人間として先生である「あなた」と向き合うのです。

「技術は、相手や状況によって変えるもの」

技術は、あなたの身についたとしても、使う相手や状況に応じて変化させ、工夫を加えていくものなのでしょう。それは、技術を使うことによって、より良い成果を得るためにです。そうでなければ、技術を使う者は意外と安易に効果が出なかった相手を審判し、比較し、批判し、否定します。良い効果が出なければ、技術に工夫を加えてみる。他の技術を使う。技術を高める。そういった、相手を思う熱心な氣もち『熱意』が、技術を使う人には、必要になるのでしょう。例えば、授業中に寝ている生徒がいる。寝ている生徒が悪いのか、寝てしまう授業をする教師に課題があるのか・・・考えてみることもできます。

「技術を使う人としての自己覚知（自分を知ること）」

まずは、自己覚知。自分の価値観を知ること。自分の技量を確認すること。今の自分に更に何が必要かを検証し、氣づき、そして常に高め続けること。自分自身に矢印を向け続ける勇氣と教育に対する誠実さを持ち続けるために、常に学び続けることです。これだけ、短期間で大きく変化する時代の中で、常に自己チェックをし、変化する覚悟を持ち続けることによって、子どもたちの不安と期待に応えることができるようになる。そんな教職者に成ることが「あなた」の後ろに歴史となって培われるのではないでしょうか。

「技術に命を込める」

人を愛し、人を想い、信じる。命という大自然の摂理のもとに「謙虚であること」。命をつむぎ、あなたの前に、あなたの生徒として届けられた命。その一つ一つに持てる最高の技術に最善の熱意を込める。あなたの成果のためではなく、あなたが向き合っている命のために・・・。その思いを再確認するかのように、福祉現場での実習が体験として用意されている。支援が必要な命との出会いをどれだけ大切に思えたでしょうか・・・

そんな熱意と技術を持ち合わせている先生との出会いを待っている子どもたちが、この世界にはたくさんいることをもうご存知だと思うのです。どうぞ、全力で届けていただけたらなあと心より願います。教育という実践に命を。